

浦幌で回収したアオジ *Emberiza spodocephala* Pallas の標識個体

持田 誠*

Makoto Mochida, 2016. The recovered of labeled *Emberiza spodocephala* Pallas from Urahoro, Hokkaido.

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 16: 21-22.

はじめに

アオジ *Emberiza spodocephala* Pallas は、シベリア南部からバイカル湖周辺を含むアムール川周辺の極東地域、サハリン、千島列島、オホーツク海沿岸、北日本、中国北東部にかけて繁殖し、冬季は朝鮮半島、西日本、東南アジア方面へ南下する、ホオジロ科の渡り鳥である。北海道へは毎年夏鳥として飛来し、平地から山地までの、市街地を含む多様な環境で見られる、きわめて身近な鳥のひとつと言える（高野 2015）。

2015年7月に、浦幌町豊北の民有地内で、右脚に金属製の足輪の付いたアオジの死体が採集された。この足輪は、環境省が実施している「鳥類標識調査」で装着された「標識」だった事から、浦幌町立博物館で鳥類死体ごと受領し、環境省から調査の委託を受けている山階鳥類研究所へ通報したところ、詳細な個体データを得る事ができたので、同研究所の許可を得て報告する。

なお、鳥類標識調査では、標識個体の拾得について「回収」と表記する事から、本報でも以後、「回収」と表記する。

採集時の状況

アオジの死体は、2015年4月24日、北海道十勝郡浦幌町豊北の民有地で、町民により発見された。午前10時頃、建物の東側扉の下に鳥が落ちていると、浦幌町役場に電話連絡があった。死体の発見者によると、この扉によく鳥があたって落ちるので、この鳥も衝突で死んだのではないかとこの事であった。回収時はまだ生暖かったので、衝突死直後のものと思われた。

10時45分頃に、連絡を受けた浦幌町役場町民課の職員により回収された。その後、死体にタグ（足輪）が付いている旨の連絡が教育委員会の文化財係へ入ったが、たまたま筆者が居合わせたため、鳥類標識調査個体（標識鳥）である可能性が高い事から、死体ごと博物館への

* 浦幌町立博物館 〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町 16-1



図1 回収されたアオジの衝突死個体。右脚に標識リングが装着されているのがわかる（矢印）

引き渡しを要請した。

引き渡し時に標識を確認したところ、環境省の表示があったため、この時点で標識鳥である事を認めた。死体を博物館へ移送後、種をアオジと同定し、標識の解除と記載事項の確認を行った。標識記載事項は次のとおりである。

KANKYOSHO

2AD JAPAN

30440

その後、ただちに山階鳥類研究所へ電子メールで連絡をした。標識・個体は博物館の冷凍庫で保存した後、後日山階鳥類研究所へ発送した。

標識町回収記録

回収された個体は、アオジの雌成鳥である。標識が日本の環境省が装着したものであったため、山階鳥類研究所のデータベースで標識装着時の情報が確認された。それによると、回収個体は2011年11月1日に、神奈川県相模原市で捕獲・標識装着・放鳥されたものである事が判明した。また、標識装着時は初年度冬羽（1W）であり、

回収時点で3歳～4歳だったものと考えられる。

放鳥地点と回収地点の直線距離は879km、放鳥から回収までの経過時間は3年5ヶ月(1270日)であった。

アオジは北海道では夏鳥だが、関東地方では冬鳥であることから、夏に北方で誕生した個体が2011年11月に神奈川県へ渡ってきた時点で捕獲・放鳥されたものと思われる。その後、2012～14年まで渡りを繰り返し、2015年4月に南方から渡って来たところで衝突死した可能性が考えられる。

鳥類標識調査の意義と普及の必要性

日本の鳥類標識調査は、1924年に農商務省によって実施されたのが始まりとされる。戦後は1961年から農林省、1972年からは環境省が調査を継続しており、千葉県我孫子市の山階鳥類研究所が「鳥類標識センター」として調査実務を受託している(環境省・山階鳥類研究所2015)。

鳥類標識調査は、「鳥類標識調査者(バンダー)」の資格を持つ専門の調査員が許可を得て野鳥を捕獲し、「標識」と呼ばれる、個体識別用の記号文字を刻印した金属製リングを野鳥の足に装着の上で放鳥し実施される。放鳥された「標識鳥」は、鳥類標識調査者による捕獲調査で再捕獲されるか、本報のような偶発的な第三者による発見によって回収され、放鳥時の記録と照合する事で、データが得られる。

標識調査からは、野鳥の行動範囲、年齢(寿命)、環境変動との関わりなどを知ることができる。野鳥の寿命は、飼育下と野外では異なる可能性が高く、標識調査による回収データは貴重な記録となる。

また、標識鳥は、標識のみを送付する事も可能だが、今回のように個体ごと送付して標本とする事もできる。標識鳥は、野外での活動履歴が詳細なため、標本から得られるデータも貴重な資料となる。

浦幌町はヒシクイやオオハクチョウ、オオワシなどの渡り鳥の中継地点として全国的に知られた地域だが、オオワシなどの絶滅危惧種と異なり、アオジのような普通種の死体は、見つかってもゴミとして処分されてしまう可能性が高い。そのため、せっかく標識鳥を放鳥しても、回収がうまくいかなかったために、得られるはずだった貴重なデータが得られない危険がある。

このため、今回の回収にあたっては、広報などを通じて広く町民にも顛末を伝え、鳥類標識調査の意義の普及に努めた。今後、博物館としては、標識鳥から得られた研究成果の実例などを示しながら、標識調査の意義について引き続き広く普及に努めていく必要がある。

標本情報・回収記録

Emberiza spodocephala Pallas アオジ ♀ Adult

<回収>

Date. Apr. 24, 2015 Collector. unknown

Loc. Japan, Hokkaido; Tokachi-gun, Urahoro-cho, Toyokita
(北海道十勝郡浦幌町字豊北)

Lat. 42.43N, 143.38E

Alt. 3-5m

回収整理番号: 020339

標本番号: YIO-73012 (山階鳥類研究所)

<放鳥>

Date. Nov. 1, 2011

Loc. Japan, Kanagawa pref., Sagami-hara, Oshima, Kamizawa
(神奈川県相模原市緑区大島神沢)

Lat. 35.34N, 139.19E

Age: 1W

謝 辞

浦幌町役場町民課(当時)の菅原伊奈子氏はじめ、課の皆様方には、拾得者からの通報にもとづく回収時の情報の収集、個体の博物館への引渡しにあたり、さまざまな協力を頂いた。公益財団法人山階鳥類研究所保全研究室の東千鶴氏、吉安京子氏には、標識回収事務に際して御指導頂き、また当館紀要での報告について許可頂いた。記して謝意を表す。

引用文献

- 高野伸二. 2015. フィールドガイド日本の野鳥: 増補改訂新版. 392pp. 日本野鳥の会, 東京.
環境省・山階鳥類研究所. 2015. 渡り鳥と足環 Bird Banding. 山階鳥類研究所, 我孫子.